# 災害関連緊急急傾斜地崩壊対策
# 埋蔵文化財発掘調査委託（高城工区）

# 調査概要

発注者：大隅地域振興局建設部河川港湾課河川砂防第一係

受注者：大福コンサルタント株式会社

# 目次

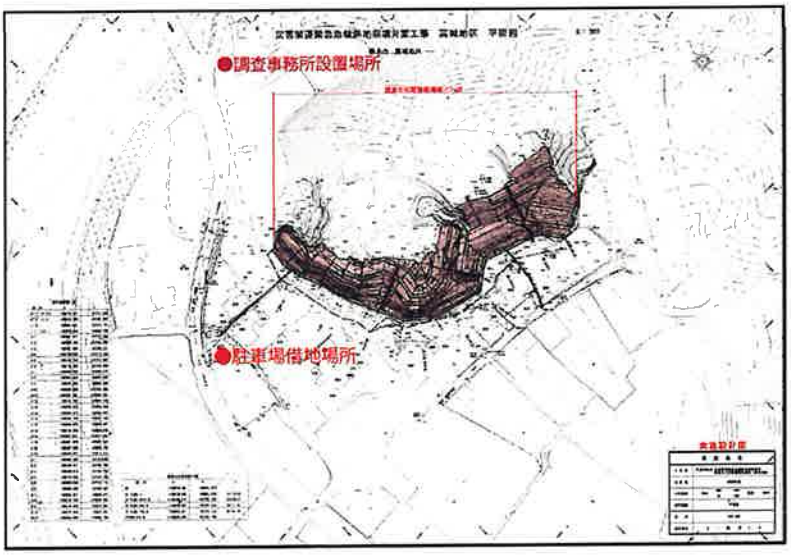
**高城跡位置図** ..... **1**

**発掘調査概要** ..... **2**

1．調査体制 ..... 4
2．当初業務工程表 ..... 5
3．変更業務工程表 ..... 6
4．業務数量総括表 ..... 7
5．調査区配置図 ..... 8
6．各調査区遺構配置図 ..... 9

# 高城跡位置図

垂水市高城跡位置図



# 発掘調査概要

平成29年度　高城跡発掘調査概要

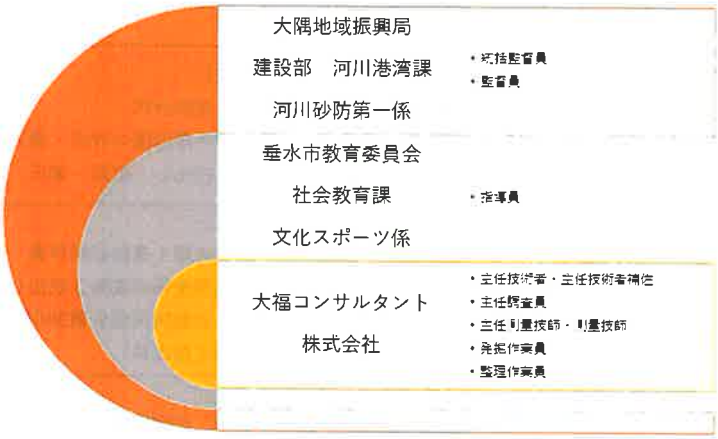
| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 業務名 | 災害関連緊急急傾斜地崩壊対策埋蔵文化財調査委託（高城工区） | |
| 2 | 遺跡名 | 高城跡 | |
| 3 | 所在地 | 垂水市高城小字本高城地内 | |
| 4 | 遺跡の立地 | 標高約41ｍの台地 | |
| 5 | 調査対象地 | 別添図５のとおり | |
| 6 | 調査面積 | 面積　257㎡　（空堀壁面を含めず） | |
| 7 | 履行期間 | 平成29年 8月22日　～　平成30年 3月 9日 | |
| 8 | 発掘調査期間 | 平成29年 8月29日　～　平成29年11月10日 | |
| 9 | 整理作業期間 | 平成29年 9月12日　～　平成30年 3月 6日 | |
| 10 | 報告書作成期間 | 平成29年11月13日　～　平成30年 2月28日 | |
| 11 | 調査体制 | 主任技術者　：井之上　宏<br>主任調査員　：倉本るみ子<br>主任測量技師　：澤邉　敏行<br>調査員兼考古学監修　：重久　淳一<br>TLS測量・三次元解析：有満　重徳 | |
| 12 | 業務内容 | 数量総括表参照 | |
| 13 | 調査工程 | 調査月 | 調査内容 |
| | | ８月 | （発掘作業）<br>契約・初回打合せ<br>壕４調査着手 |
| | | ９月 | （発掘作業）<br>壕１～４調査、段階確認（清水監督員、羽生指導員）<br>発掘調査準備（営繕・作業員雇用等）<br>曲輪３発掘調査・測量・土工業務<br>（整理作業及び報告書作成）<br>遺物洗浄作業 |
| | | 10月 | （発掘作業）<br>曲輪２・３・空堀の発掘調査・測量・土工業務<br>段階確認（清水監督員、羽生指導員）<br>（整理作業及び報告書作成）<br>遺物洗浄・遺物注記作業 |
| | | 11月 | （発掘作業）<br>曲輪１・２・３・空堀の発掘調査・測量・土工業務完了<br>段階確認（清水監督員、羽生指導員）<br>（整理作業及び報告書作成）<br>遺物洗浄・遺物注記作業<br>遺物分類・抽出作業<br>遺物実測図作成・トレース図作成作業 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 13 | 調査工程 | 12月 | （整理作業及び報告書作成）<br>遺物洗浄・遺物注記作業・遺物分類・抽出作業<br>遺物実測図作成・トレース図作成作業、報告書文章作成<br>報告書用第２原図、図面の作成、写真撮影・整理・図版の作成<br>報告書用全データの入稿、各種打合せ、<br>段階確認（清水監督員、羽生指導員） |
| | | １月 | （整理作業及び報告書作成）<br>遺物洗浄・遺物注記作業・遺物分類、<br>報告書文章作成・修正、報告書図面の作成・修正、<br>発掘調査報告書初校・第２校出し、確認・修正、各種打合せ |
| | | ２月 | （整理作業及び報告書作成）<br>遺物洗浄・遺物注記・遺物分類・遺物収納作業・確認・修正、<br>各種台帳作成・修正、発掘調査報告書第３校出し確認・修正、<br>各種打合せ、印刷会社より発掘調査報告書300部納品、<br>段階確認（清水監督員、羽生指導員） |
| | | ３月 | （整理作業及び報告書作成）<br>遺物収納作業・確認・修正、発掘調査報告書300部発送、<br>発掘調査成果物納品（垂水市教委搬入）<br>納品・完了検査 |
| 14 | 安全教育及び環境整備 | 新規入場者教育，ラジオ体操，危険予知活動，熱中症対策，<br>各種安全標識の掲示，AED，安全通路の設置 | |

| | | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 |
|---|---|---|---|---|
| 15 | 調査の成果 | 中世 | 空堀、溝、土塁<br>門跡、道跡、土坑 | 土師器、東播系須恵器、瓦質土器、青磁、<br>白磁、青花、輸入陶器、備前焼、漆製品、<br>銭貨、銅製品、ふいごの羽口、<br>鉄滓（椀形滓・流動滓・鉄塊系遺物）、<br>石臼、滑石製石鍋、砥石、火打石<br>出土遺物総点数 1,071点（内NO.付 449点） |

高城跡は主体が中世の時代の遺跡である。今回の調査対象区は高城跡のなかでも西端の箇所にあたる。約10ｍの火砕流堆積物を掘削した空堀内に位置する櫓門構造を持つと思われる門跡、その背後に控える階段状遺構や虎口と思われる跡、その虎口から上がると思われる曲輪、その曲輪の真下、比高差約20ｍに掘られた空堀とその中にも小さいが門跡が検出された。今回調査したのは高城跡の搦手門跡とその周辺と推測する。大手門及びその周辺の曲輪、南側の野首を切った深い空堀などは残存状態が大変良好であり、この城が往時堅牢な守りの城であったことは想像に難くない。

## 1．調査体制




### 調査担当者

統括監督員　上 室　　健（大隅地域振興局　建設部　河川港湾課　河川砂防第一係長）

監　督　員　清水　良太（大隅地域振興局　建設部　河川港湾課　河川砂防第一係技術主査）

指　導　員　羽生　文彦（垂水市教育委員会　社会教育課　文化スポーツ係　副主幹）

土工・測量照査　澤邉　敏行（測量士）

考古学的照査　重久　淳一（日本考古学協会会員・学芸員）

主任技術者　井之上　宏（１級土木施工管理技士・第１種衛生管理者）

主任技術者補佐　益山　隆一（２級土木施工管理技士）

主任調査員　倉本　るみ子（埋蔵文化財調査士・学芸員）

主任測量技師　澤邉　敏行（測量士）

測 量 技 師　有満　重徳（測量士）

測量技師補　新村　俊二（測量士補）

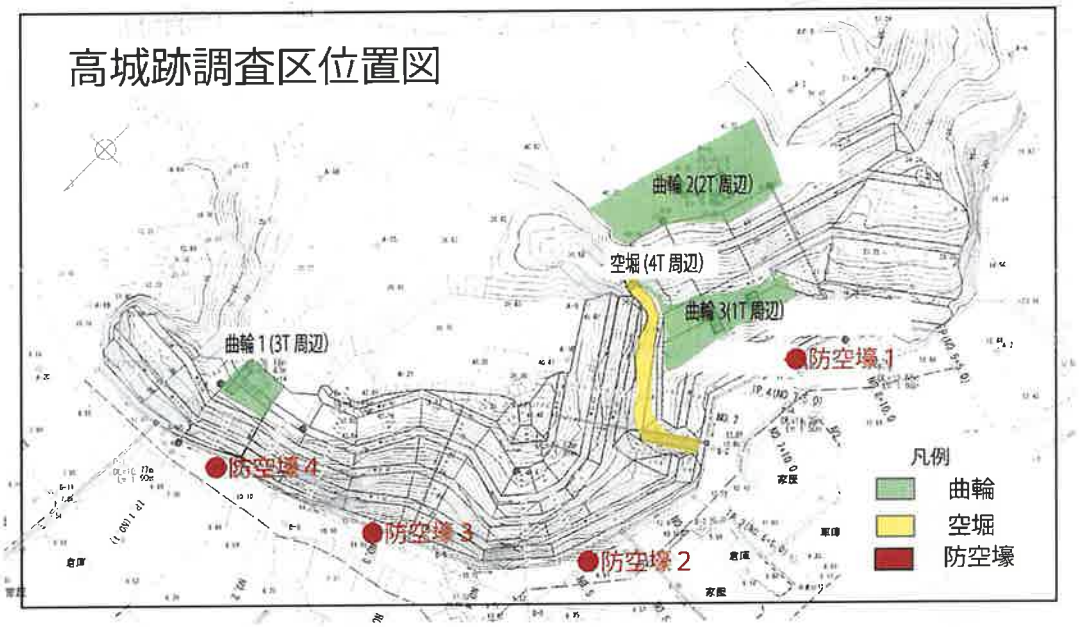
発掘作業員　赤嶺　信之介、大迫　ちや子，奥　重光，迫田　タマ子，
瀧川　清，中島　義秋，宮迫　ツル子

整理作業員　黒丸　そのこ，園田　加代，宮元　浩二，宮元　啓太

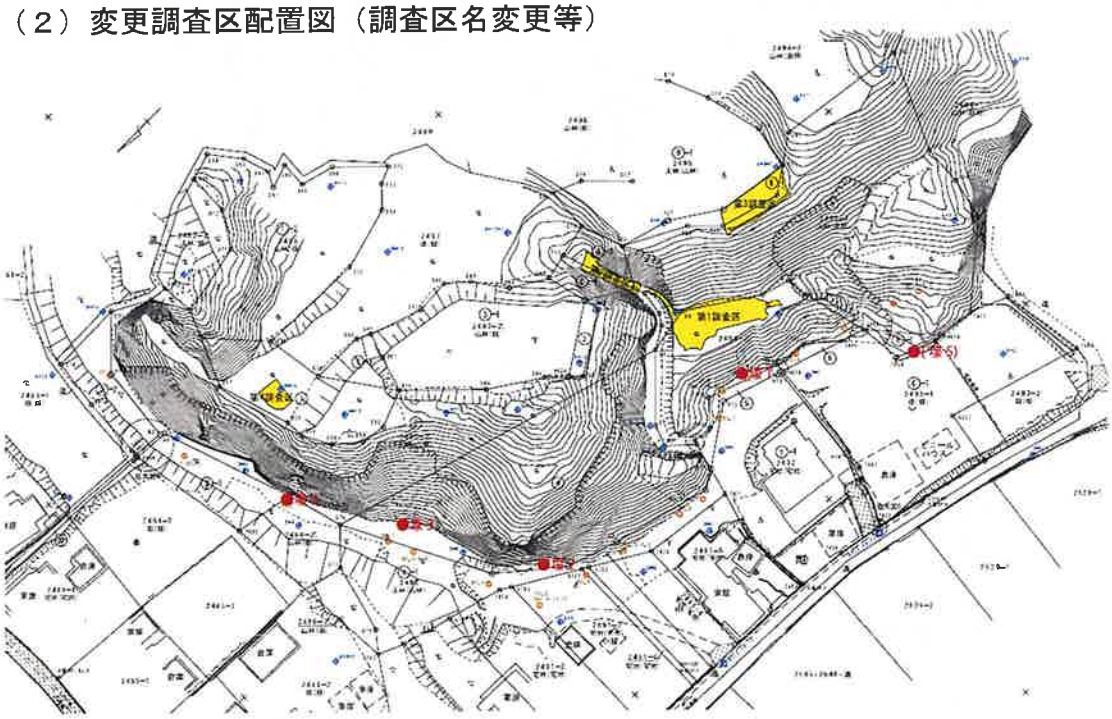
事務・庶務　川野　千尋，奥園　直子，立本　洋久，竹田　茉由

## 5．調査区配置図

### （1）当初調査区配置図

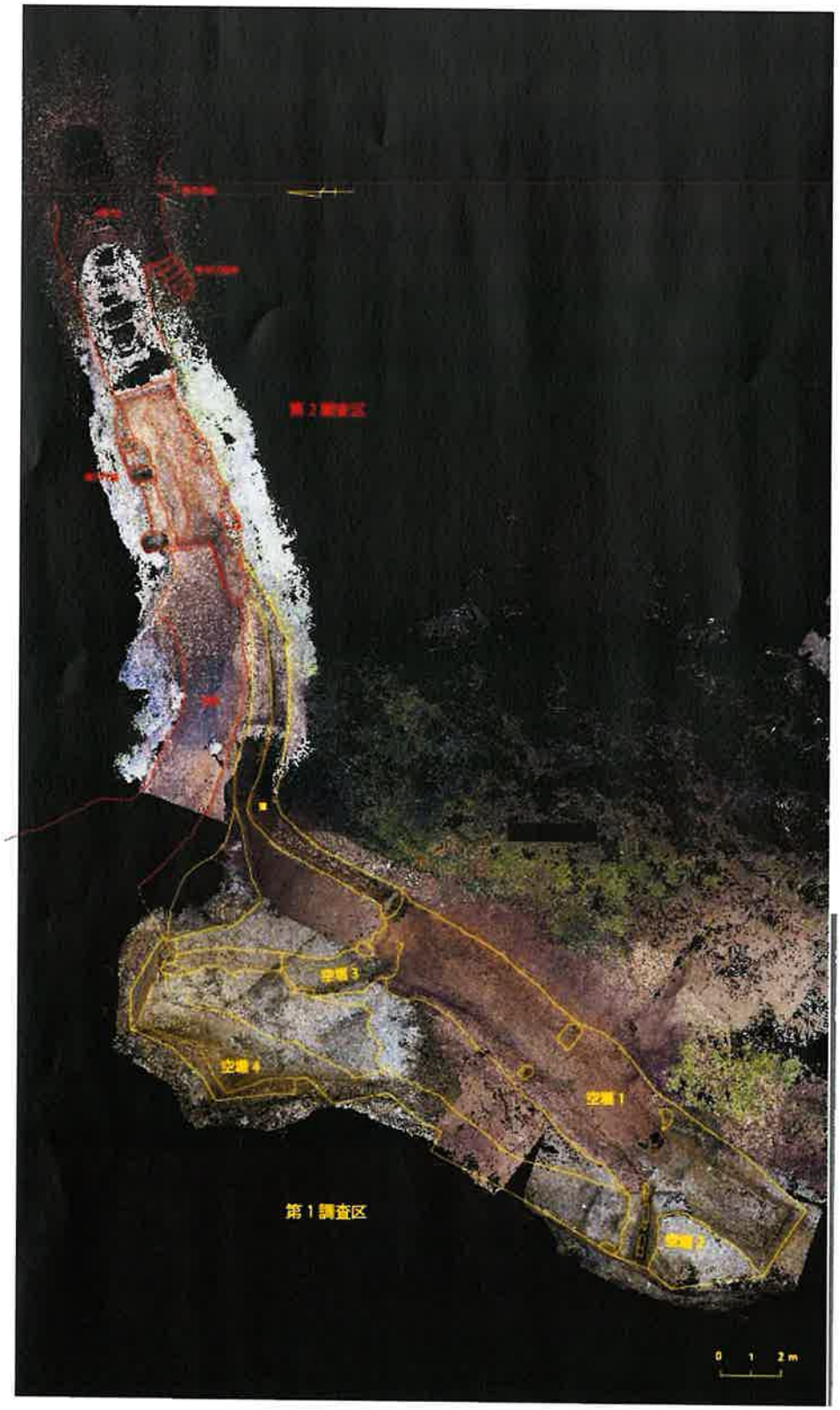



### （2）変更調査区配置図（調査区名変更等）

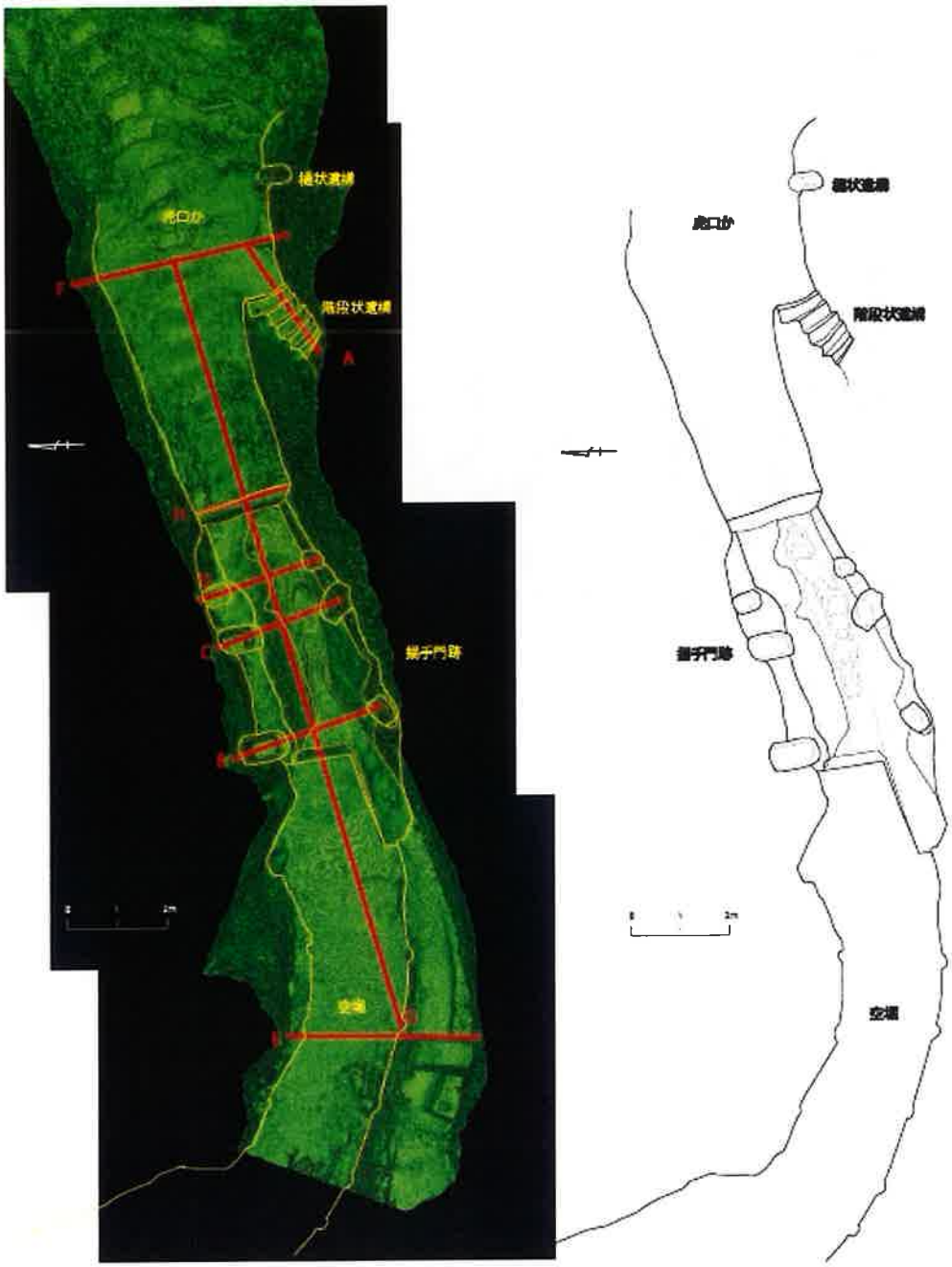


## 6．各調査区遺構配置図

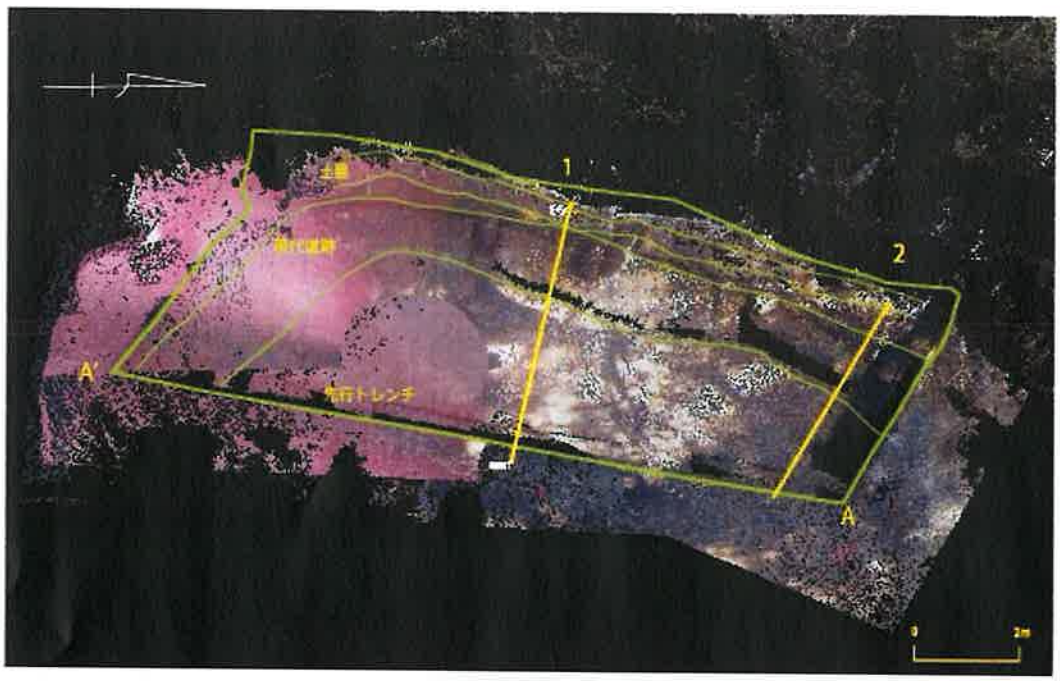
### （1）第１調査区・第２調査区



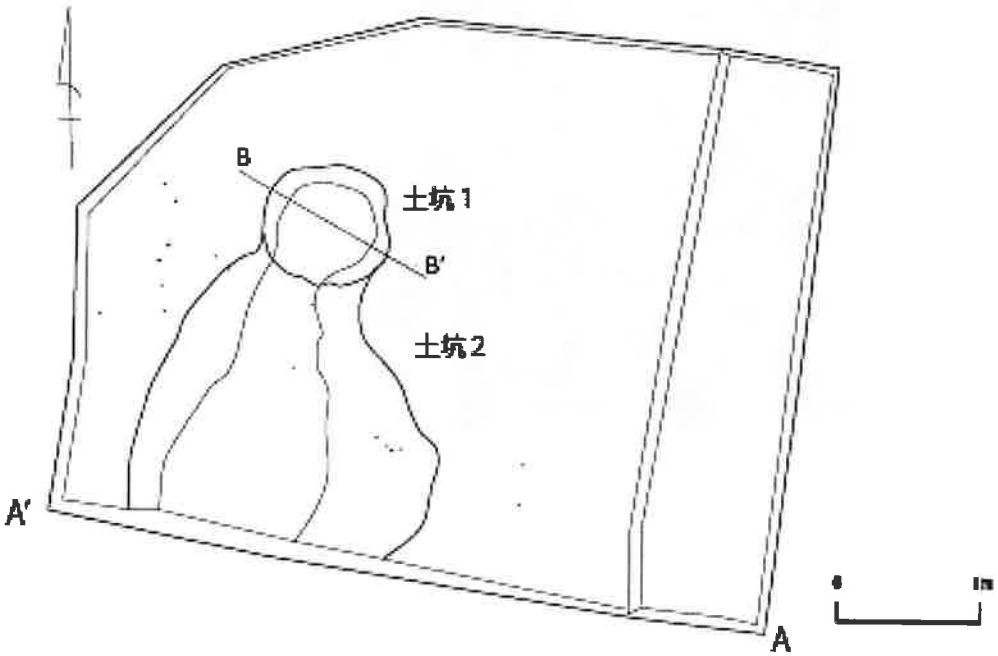
（２）第２調査区（追加調査箇所含む）



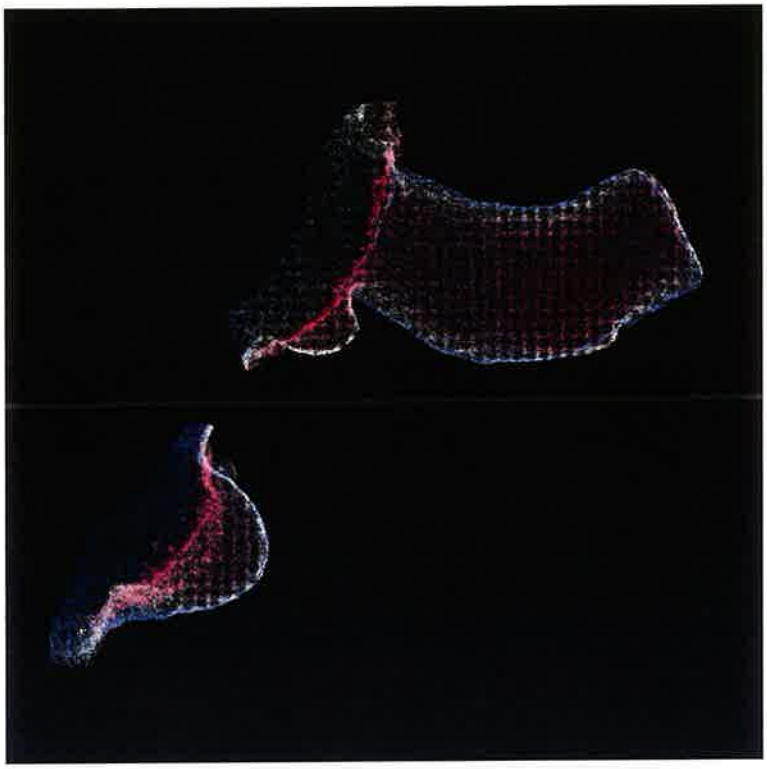
（３）第３調査区




（４）第４調査区

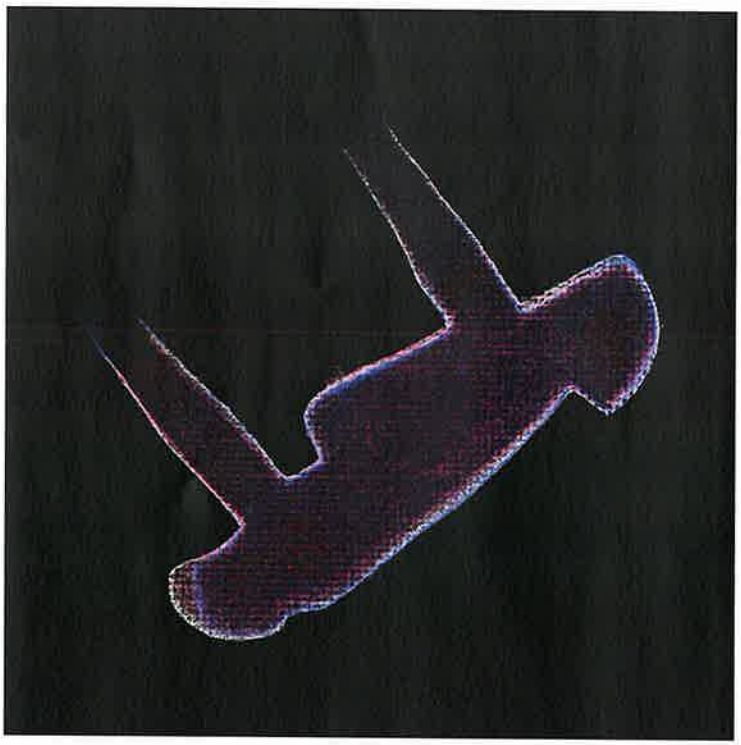


（５）壕１（図面上方が真北）



（６）壕２（図面上方が真北）

（７）壕３（図面上方が真北）



（８）壕４（図面上方が真北）

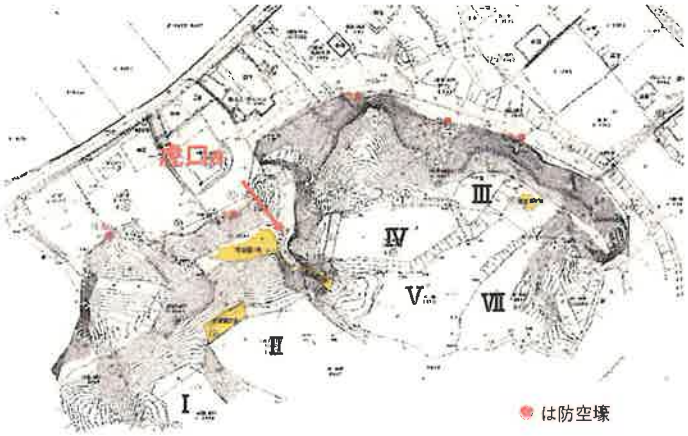
※（５）～（８）は縮尺不同

# 垂水市高城跡の縄張りについて

南九州城郭談話会例会　平成30年５月27日（日）
於垂水市市民館　　重　久　　淳　一

## １　高城跡の位置と環境

高城跡は、高隅山地から西に延びる丘陵上にあり、標高は、曲輪Ⅰの櫓台と思われる最も高いところで約52mを測る。下の低地とは約40mの比高差である。台地はある程度の起伏があり、そこに手を加え城を構築している。北東から南東方向にやや大きめの谷状の地形があり、そこをさらに削平し、堀としている。本城川に臨む北側は絶壁であるが、崩落や土取りによる削平がみられる。北西の現地表に高い部分が残っており（次頁縄張り図a）、曲輪Ⅲなどはかなり面積が縮小したことが窺われる。高城跡は本城川の左岸に位置し、旧河口から約３㎞上流にある。対立していた伊地知氏の居城とされる本城跡は西約１㎞の距離にある。



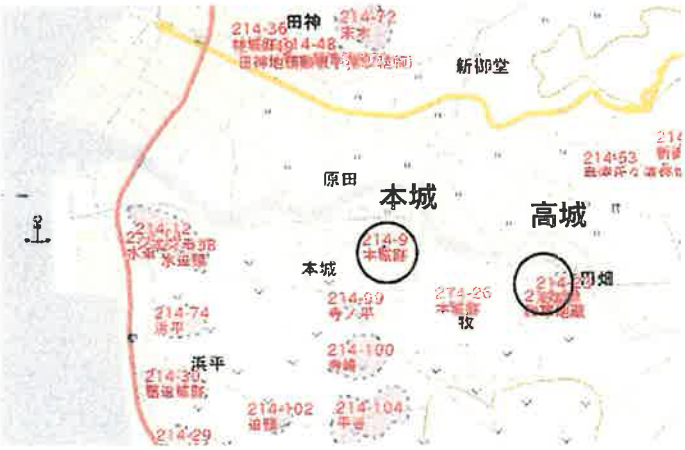

高城跡調査地点

## ２　高城跡の歴史的環境

伊地知季豊が垂水に入る以前にこの地を領有したのは肥後氏である。「肥後氏は平姓をなのり、種子島氏の祖となっている平肥後守信基の支族とみられる」（垂水市史編集委員会1998)、信基の二男信行が種子島から下大隅（垂水）に下向した。13世紀後半から14世紀初頭に、肥後氏３代信盛が高城に居住たとされ、大永２(1522)年に伊地知氏に敗れるまで、高城は機能していたと思われる。

寛政８(1796)年の『隅府温故集』によれば、城の規模は周囲約１㎞であるとされる。

一　城の惣廻り　九町　但し山城
一　本丸の廻り　一町五十二間
一　城の高さ　但大手口亥の方　一町
一　城より地行高き所の相の間　二十八間
一　城より海辺迄　二十四町二間




高城跡と本城跡の位置

## ３　調査の概要

①調査起因：災害対策のための急傾斜工事
②確認調査：平成29年２月20日～３月２日
　本 調 査 ：平成29年８月24日～11月10日
③調査成果：遺構としては、空堀内に櫓門構造をもつと思われる門跡、その背後に控える階段状遺構、土塁など。
　異物としては、土師器、東播系須恵器、瓦質土器、青磁、白磁、青花、輸入陶器、備前焼、タイ産陶器、高麗青磁、漆製品、銭貨、鉄製品、鉄滓、石臼、石鍋、砥石など。

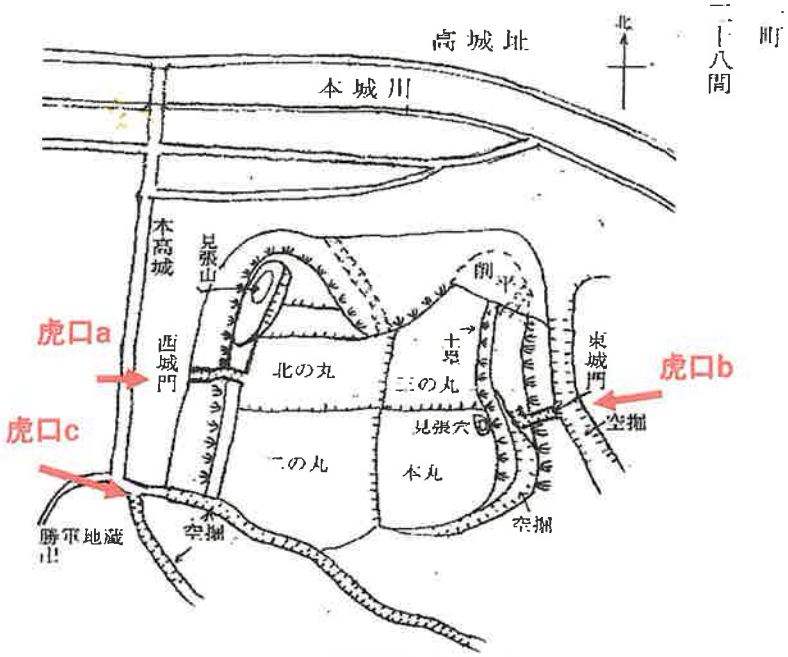
## ４　曲輪

曲輪は、平坦にするために高い部分を削りだして作出している。その際、台地の端部を削らずに帯状に残し、土塁としての機能を持たせている。

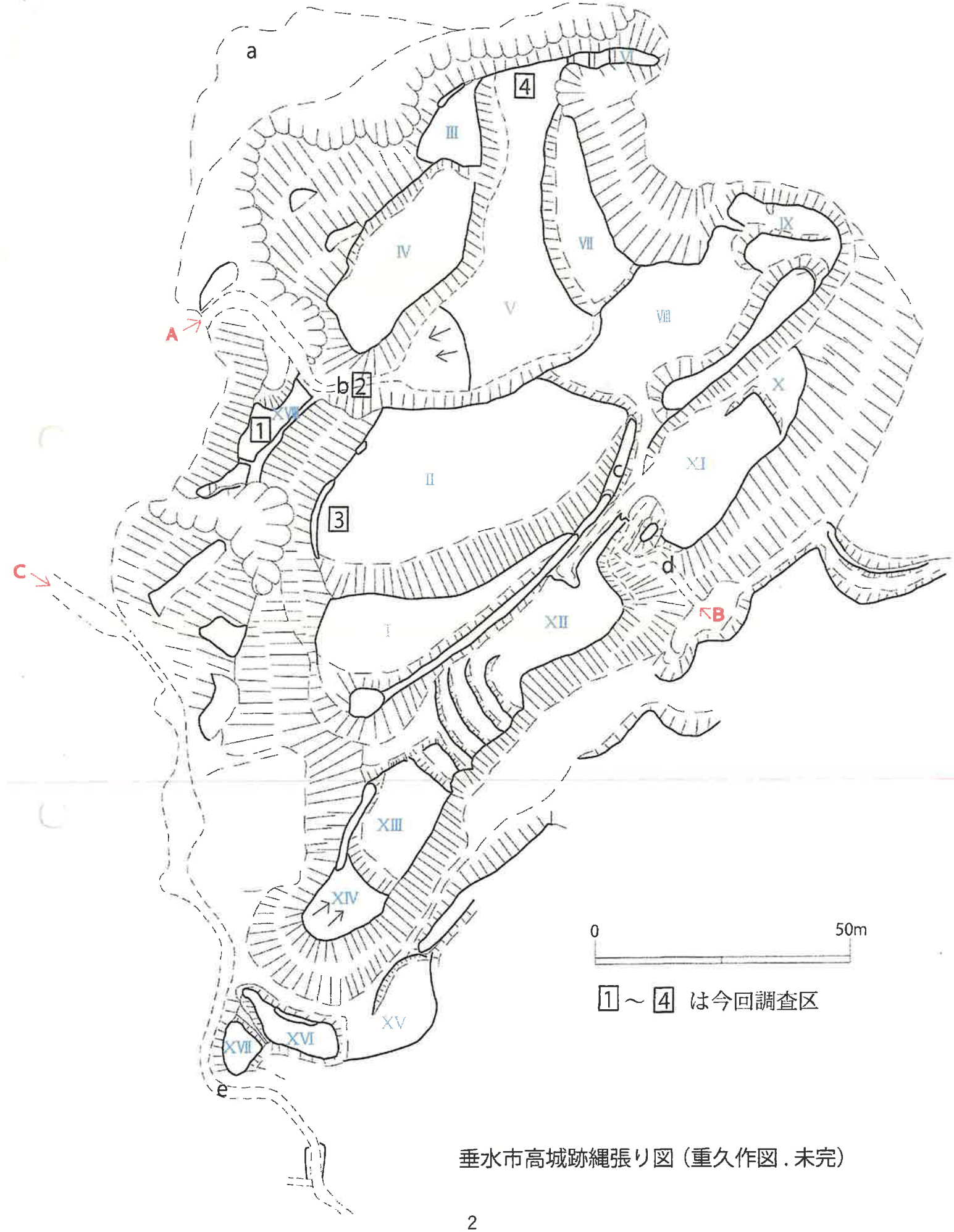
主郭と思われる曲輪Ⅰは三角形状を呈し、それほど広くはない。東西約15m×南北10mで、東側を高さ約1.5m、幅約２mほど削り残した土塁が走る。その北東に延びる土塁に沿って、曲輪Ⅰからは幅約２mの帯曲輪が約30m延びる。また、曲輪Ⅰの南西には７×７mの櫓状の平坦部を有する。曲輪Ⅱは65×25mと最も広く、西側端部の第３調査区に高さ数十cmの土塁状の高まりを残す。南側の曲輪Ⅰ側には高さ約８mの切岸がある。

## ５　土塁

最も長くかつ高い土塁は、南西から北東に延び、その長さは大手門から入る曲輪Ⅷの虎口までの約70mである。土塁は、途中、何回かの段差を造るが、曲輪Ⅱでは10m近い高さになる。途中、遠見といわれる半円空洞（C）がある。土塁は、曲輪Ⅷにもその続きがみられることからみて、南からの防御を意識していたのは明らかである。これら土塁には、曲輪を構築する際に削り残して土塁としたものと、盛り土で構築した可能性のある低い土塁がある。曲輪Ⅲの北側及び曲輪Ⅱの西側、曲輪ⅩⅢの西側、曲輪ⅩⅥの北側に低い土塁が残る。




高城跡縄張り図
（『垂水市史上巻』より）




垂水市高城跡縄張り図（重久作図．未完）

## 6　堀

堀には２種類のものがあり、下面幅約２ｍの狭いものと、台地を区画するための上面幅10ｍ以上の広い堀がある。虎口Ａ・Ｂ・Ｃの堀が前者で、勝軍地蔵側から入る虎口Ｃの空堀は曲折しながら150ｍも続く。垂直に切り立った幅の狭い空堀は類をみないものである。薩摩川内市の清色城の大手門入口約50ｍが類似するのみである。

虎口Ｂが大手と思われる空堀の入り口である。ここも屈曲しながら、曲輪Ｘ１に入る。途中の壁には多数の窪みが穿たれており（d）、「板戸をはめこむように工夫されている」（『日本城郭体系 鹿児島県』）。南側の未調査地区にはこのような幅の狭い空堀が他に３ヶ所もあり、城の範囲は南に広がっている。また、曲輪の周囲をめぐる横堀がないことも特徴的である。曲輪は切岸によって区画されており、主郭が明確でなく各曲輪が独立する、いわゆる南九州型の城郭とは異なる。

## 7　その他

①壁絵：顔面を描いたと思われるものが10基以上あり、その位置が、現状では人の手の届かない高さにも多数あることから、当時のものと考えられる。何らかの意図があったのであろう。敵を撃退するための魔除け的なものと考えられる。

②工具痕：空堀を掘削した時の工具痕がはっきりと残っており、壁面にカーブがみられ、作業した角度が推定される。約10ｍの高さを10回近く掘り下げている。

## 3　今後の課題

①城全体の縄張り図の作成。
②廃絶時期を含め、城の構造の検討。
③周辺の城郭との比較と曲輪名称調査
④南九州型城郭の成立時期
⑤高城型空堀の意味するもの
⑥交易等における本城川の役割

本城川「海口にては濶さ70間（約126ｍ）ほどありて、水勢頗る大なり、･･･、満潮の時は、巨船出入りして、当邑の港とす」（三国名勝図会）

## まとめ

①曲輪構築の際に一部を掘り残して土塁としている。曲輪は横堀によって区画されてなく、切岸によって他の曲輪と区切られる。

②空堀の下底面幅が約２ｍで、150ｍも続く垂直壁の空堀が存在する。③空堀の壁に壁絵が描かれている。

以上のことから、高城は、南九州の典型的な山城である知覧城や志布志城のような、南九州型城郭とは異なるプランを持つ。また、幅の狭い空堀が長く延びるのもあまり類を見ない。高城は、遺物からみても16世紀前半ごろまでに廃城している可能性がある。とすれば、南九州型城郭が導入される以前の城郭か、もしくは、まったく異なるプランをもつ城郭と考えられる。肥後氏と思われる築造者も含めて周辺をさらに調査する必要がある。


参考資料
・小幡　晋　1969 『南九州の城址』株式会社耕文社
・三木　靖　他 1979『日本城郭体系』18
・原口虎雄監修 1982 『三国名勝図会』第三巻　青潮社
・鹿児島県教育委員会 1987『鹿児島県の中世城館跡』
・知覧町教育委員会 1992『知覧城跡』知覧町文化財調査報告書第３集
・千田嘉博・小島道裕・前川要　1997『城館調査ハンドブック』新人物往来社
・垂水市史編集委員会 1998 垂水市史 上巻』垂水市


1　南九州型城郭とは

「シラス台地の辺縁の崖を空堀とした、九州南部に見られる城。1987年村田修三氏が「図説中世城郭辞典」で初めて報告。群郭式の縄張り。曲輪が階段状ではなく空堀で隔てられた、ほぼ同じ標高の曲輪が林立している配置。シラス台地の辺縁の崖（ガリ地形）を空堀として使っている。そのため深く幅広な空堀と、高い切岸を造成しやすい。堀の深さは、知覧城では20～30ｍに及ぶ。寄せ手が本丸・主郭の位置を把握しにくい。寄せ手は、攻城時に深い堀底道を通る。そのため見通しが効かないのが理由。曲輪同士の連携・統制が取りにくく各個撃破されやすい。幅広な空堀が曲輪同士の連絡を妨げるのが理由」（ウイキペディア）。千田嘉博氏は「館屋敷型城郭」と呼ぶ。

①平坦なシラス台地に造られる。
②中心の曲輪がはっきりしない。求心性のない城郭
③各曲輪に名称がつく。
④典型的な南九州型城郭としては、
知覧城・伊作城・清色城・志布志城・建昌城

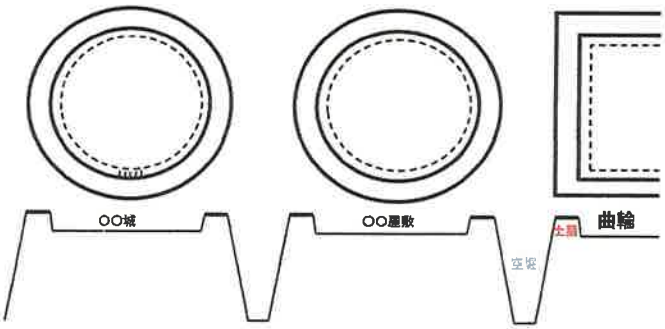
2　岩剣城型城郭

①起伏のある地形で、主郭が明らか。
②シラス台地が主体の鹿児島の台地では少ない。

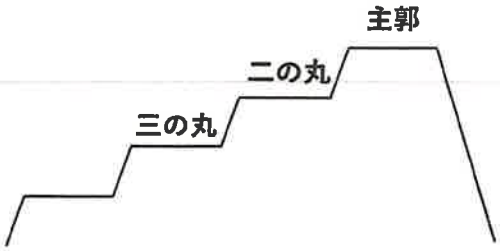
3　高城型城郭？

①切り立った幅の狭い空堀
②切岸による曲輪の区画作出

**南九州型城郭の平面・断面**




**岩剣城型城郭**



**虎口Ｂの門跡**

遠見（c）

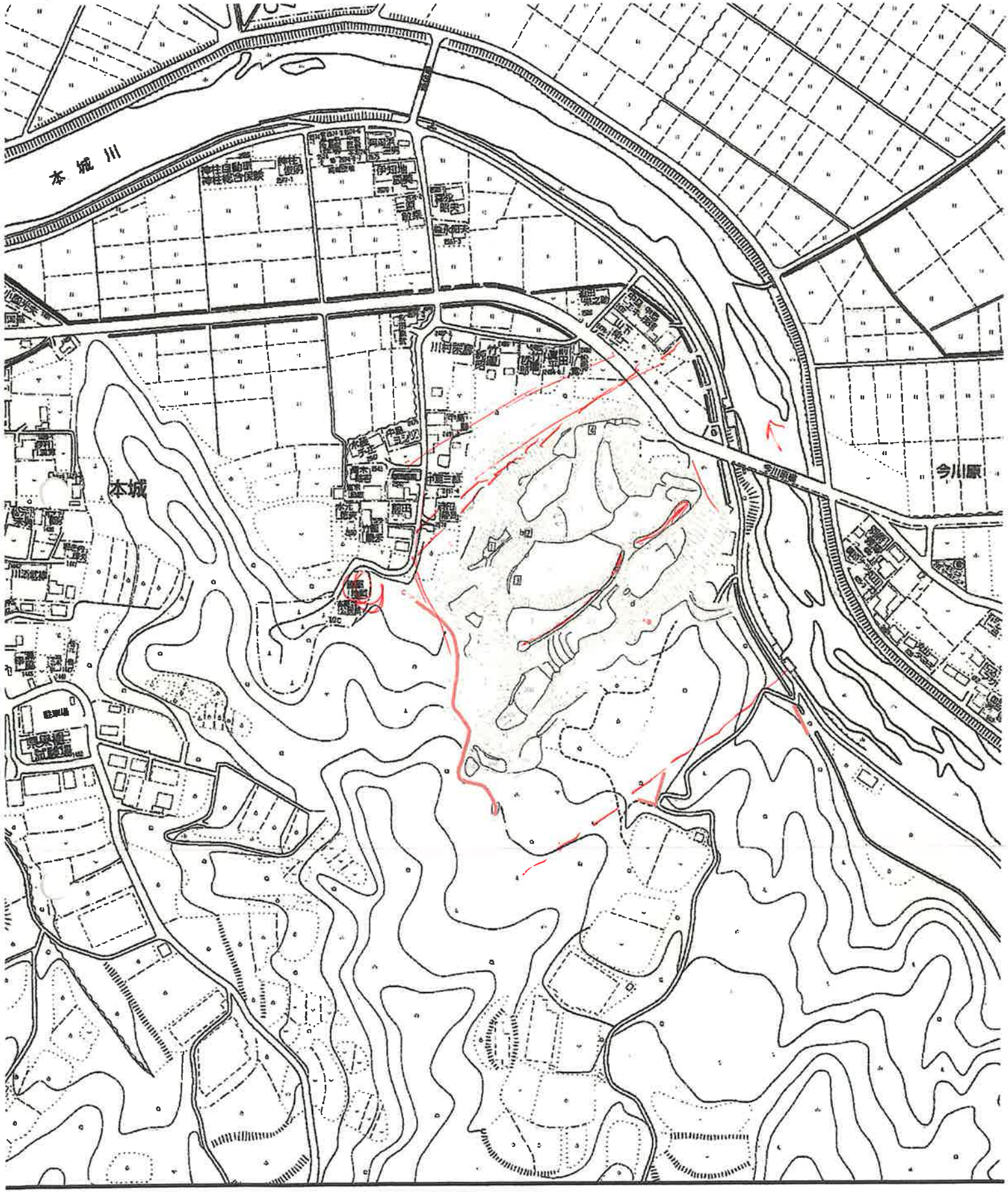
曲輪ⅩⅦから見える空堀

虎口Cの工具痕

虎口Cの空堀

虎口Cの壁絵(e)

虎口Cにある壁絵（e）




高城跡　垂直に切り立った空堀